

おいでん・さんそんSHOW

9月号
2018.09 .01発行



特集一 早稲田大学国内インターンシップ
山村で見つけた幸せの選択肢

旭
あさひ

セカンドスクール「山っこクラブ」のボランティアスタッフをした早稲田大学の学生は、大きな学びを得た

「早稲田の学生の7割は首都圏出身のため、在学中に地方の暮らしや、地域で起業する人など多様なあり方に触れてほしい。学業以外の経験値の高い、人間的に魅力ある人材を育てよう」と全国で地域連携を進めています」とレジデンスセンターでプログラムを担当する関口貴仁



旭地区での間伐体験の様子

(※)ミライの職業訓練校:山里に生きるための必要な技を学び、仲間とともに実践し、切磋しながら生きる糧を身につける学びの場

3万3千900食。昨年8月の発売開始からわずか1年で製造した「とよたの里山猪肉カレー」の数、販売数は現在約2万食である。

vol.46

レットルト猪肉カレー

センター長のミライのフツーに 向かって！



センター長
鈴木辰吉

遊休農地を活用した社員研修を経て、社業を通じて地域貢献をしたい「カレーハウスcoco吉番屋」をフランチャイズ展開する(株)ワイズ、高校魅力化を図りたい足助高校、駆除期の猪肉の販路に苦慮する獣肉処理加工施設(株)山恵、共同開発者の3者と足助商工会、観光協会、とよた山里HD、豊田JC、市農政課がおいでん・さんそんセンターで第1回商品開発会議を開いたのは1年半前。最小製造ロットの2千200食をどう売り捌くか、助成制度もなく誰がリスクを背負うかが議論されていた。

第1弾「猪肉キーマカレー」に次ぐ第2弾「猪肉和風カレー」の売れ行きも好調。来年の第3弾「猪肉欧風カレー」の開発が現実味を帯びてきた。(株)ワイズは、企業価値、社員のマインド向上を、足助高校は、平成31年度にスタートする「観光ビジネス類型」コース新設の原動力を、(株)山恵は、駆除期の猪肉年間1t超の販路を得ることができた。

出会うこともなかった3者がセンターの仲介でつながり、それぞれが抱える課題を解決し、地域特産品としての新たな価値と経済循環を生んだ。そして、山里の豊かな食文化「ジビエ」の振興にも大きく貢献することとなった。

8月4日(土)から10日(金)、早稲田大学・国際学生寮WISHに入居する学生6人が、豊田市に滞在。寮を運営する早稲田大学レジデンスセンター企画の「国内インターンシップ研修プログラム」に参加しました。都市と山村を併せ持つ豊田市の先進的な取組を学生に学んでもらおうと、同大学、市企画課、おいでん・さんそんセンター、研修プログラム全体をコーディネートした(株)Measyが連携し、実施に至りました。

今回は話します。今回参加した学生は、引率の4年生以外は全員1年生で、うち2人は台湾の留学生。皆さん「車の街での田舎体験」という意外性に惹かれて応募を決めたそうです。

先進モビリティと間伐体験
初日は、都市部のとよたエコフルタウンとトヨタ会館で、最先端技術・モビリティを体感し、夜は、すげの里でミライの職業訓練校(※)の受講生と交流しました。

グローバル人材を地方で育てる
東京・中野にある国際学生寮WISHは、早稲田がグローバルリーダー育成の新たな拠点として、2014年に開設。約900人の日本人学生と留学生が同居し、学生の成長を促すプログラムや留学生との交流が盛んに行われる新しいスタイルの学生寮として注目を集めています。

イベント情報

はじめての聞き書き講座～インタビューとライティング～

- 日時 | 9月29日(土) 10:00～15:00
- 場所 | 足助交流館
- 内容 | 人生の先輩であるお年寄りの方々に、昔の仕事や生活の智恵や技、暮らしの苦労など、その生き方を聞かせていただき、「話し言葉」だけで文章にまとめるのが「聞き書き」です。当日は、次の2点を行います。①「聞き書き」の概要・手法を学ぶ②「聞き書き」の体験・実習
- 講師 | NPO法人共存の森ネットワーク 事務局長:吉野奈保子氏(予定)
- 対象 | 聞き書き手法に興味をお持ちの方
- 募集人数 | 20名程度
- 参加費 | 無料
- その他 | 聞き書き講座受講後、聞き書き作品作りを希望される方は、ぜひ「あすけ聞き書き隊」として、足助の聞き書き第8集の作品作りにご参加ください。
- 申込・問合 | 9月25日(火)までに「あすけ聞き書き隊」(高木)へ
Tel:090-8732-6308 mail:kgt@asuke.org

つくラッセル森のめぐみ企画『樹木を使ったオリジナル木工教室』

- 日時 | 9月9日(日) 10:00～15:00(受付9:30～10:00)
- 場所 | つくラッセル(豊田市旭八幡町堂山432-3)
- 内容 | 地域産の広葉樹や間伐材を使ってツールなどを作ります。
- 定員 | 10人
- 応募方法 | ファックス(050-3488-9128)またはメール(info@tukurassell.life)でお申込みください。件名を『9月9日申込』とし、次の5点を連絡ください。①氏名②年齢③住所④電話番号⑤E-mailアドレス
- 持ち物 | 弁当、飲み物、軍手、作業しやすい服装。ある方はヘルメット、チェーンソー防護スパッツ、インパクトドライバー、のこぎりなど木工道具
- 参加費 | *参加費:3,000円(講師料、道具使用料2000円+材料費1,000円/1脚*保険料金が別途かかります。
- 問合 | つくラッセル森のめぐみ企画会議 電話:090-5453-6411(山本)



その他の情報は、センターHPをチェック!

REPORT



メグリア組合員向け「トウモロコシ収穫と自然体験会」開催



4倍以上の倍率から25組100名が参加

8月4日(土)、トヨタ生協(メグリア)の組合員向けイベント「トウモロコシ収穫と自然体験会」が、稲武地区・小田木町と大野瀬町で開催されました。

このプログラムはいなぶ観光協会の村瀬登美さんにコーディネートしていただき、2013年にセンターがマッチングして6年目を迎えています。4倍以上の倍率から選ばれた25組100名の参加者は、トウモロコシのもぎ取り体験、清流での川遊び、鮎や夏野菜など旬の味覚を堪能しました。

トウモロコシ狩りに協力いただいたのは、昨年発足したファームい



とうもろこし畑に入る参加者たち

なぶ営農組合・代表の石橋徹さん。当初予定していた畑は台風とアライグマの被害に遭い断念し、急遽、小田木町の圃場に変更されました。山村地域で農業を営む難しさも参加者に感じていただけたことと思います。

会場となった大野瀬町の「おいでん・やな」では、10月末まで川魚のつかみ取りや川遊びを楽しめます。また、テント広場では鮎の塩焼きや五平餅など美味しい食を満喫できます。夏のおススメスポットを是非訪れてみてください。詳しくは、いなぶ観光協会のホームページ(<http://inabu-kankou.com/>)を参照ください。(坂部友隆)

REPORT



2018年セカンドスクール夏フリー版開催



市内4箇所、7回のプログラムを実施

山間に響く子どもたちの声を聞きながら、じっと黙って座っている子どもの視線を追うと、軒下に猫が涼んでいる姿がありました。セカンドスクールの一場面です。8月6日(月)、2018年夏フリー版が始まり、8月30日(木)までの間に、豊田市内の4箇所、7回のプログラムが開催され約120名の小学生が参加しました。

収穫体験、お家のお手伝い、ドラム缶風呂やゲル(モンゴルのテント)での寝泊まり、農家さんのお宅へのホームステイ、ものづくりを学ぶ学生の方々と共同生活体験、保証された自由な時間など、2日間または3日間の体験を経て、それぞれに環境が変わることで得られる経験ができたのではないかと思います。

子どもたちが帰り際に、名残惜しそうにしていたり、高校生になったらスタッフとして参加したいという声があったりしました。こういった機会をつくっている各主催団体、地域の方、スタッフ、受け入れ農家の方々の陰ながらの苦労が、報われる瞬間だと感じます。(田中敦子)



つくラッセルでの様子

REPORT



『芳友町の万燈まつり』に申込が殺到



とよたまちさとミライ塾 for Kidsのプログラムとして告知

サポートを初めて5年目になる「芳友町の万燈まつり」を今年も「とよたまちさとミライ塾 for Kids」のプログラムとして行いました。お盆休みで帰省したり、地元のお祭りに参加する方が多いので、毎年参加者が集まるか心配していますが、今回はミライ塾で告知したため、キャンセル待ちが出る程の申込みがありました。

燃え盛る炎のついたたいまつを振り回すダイナミックな体験に、最初は尻込みする子どももいましたが、最後には全員がひとりで振り回す事ができました。

たいまつを振り回すことができるのは、小中学生男子だけです。芳友町室地区の男子児童は3人だけなので、祭りの継続が困難になっていましたが、今回参加した子どもの多くが来年も参加したいと言っていたので、来年以降も応援を得て祭りが継続され、参加する児童も貴重な体験ができると思います。(西田又紀二)



勇気のあるダイナミックな体験



あんどんを持って列になる

例について学びました。森林ボランティアグループ「旭高原山楽会」の指導による間伐体験では、森林問題の実状や間伐の効果を肌で感じ取っていました。

ボランティアを通じた学び

3日目からは、おいでん・さんセンター・セカンドスクール部会が主催する「山つ子クラブ」にスタッフとしてボランティア参加しました。

セカンドスクールは、市内の小学生が山村体験を通じて生きる力を育むプログラム。29人の子どもたちと共に、3日間を過ごしました。

学生の皆さんは、リーダーとして自由時間の遊び相手、肝試しの脅し役、ドラム缶風呂の見張り役などになっていました。いたずらを仕掛けてくる子どもに對し、どこまで許容すれば良いか戸惑っている学生もいれば、お気に入りの学生にべったりの子もいました。

学生も子どもたちも、他者を受け入れ、見守り、交流するなかで学んだ3日間でした。決まったカリキュラムがない自由さや、子どもの自主性を尊重する山つ子流の教育スタイルは、学生たちにとって新鮮な体験だったようです。

また豊田に戻って来たい

最終日には、全体の振り返りがありました。「何かしようという気持ちがある、この人たちに共通してあって、その力が人を繋いでいるのだと思っ」、「競争しあうだけではないスピード感、呼吸の仕方を知ることができ、とても楽しかった」、「自分に合う生き方は何か、探す機会を与えてもらった」、「苦しくなった時には、豊田に帰って来たい。自分にもう一つ選択肢があることは幸せなことだと感じた」と次々に想いが溢れて、涙する学生もいました。

暮らしを大切にしている人たちの出会い、山つ子クラブの子どもの関わり、豊かな自然環境に触れる生活が、それぞれに自らの素直な感情に向き合う機会となったようです。

受入れ側としても学生たちの反応を通して、山村の持つ価値について改めて確認することができました。

彼らの学生生活はまだ始まったばかり。今回の経験が成長の糧になれば幸いです。また、これからも早稲田大学との連携を継続し、深めていければと思います。(坂部友隆)



流しそうめんの様子



山つ子クラブの参加者とスタッフの集合写真



つくラッセルの玄関にあるソファで、男子チーム



子どもたちと囲む食卓



困るくらい(?)大人気



ドラム缶でお風呂



最終日、振り返りでは、それぞれの感想を共有した



活動の拠点になったつくラッセルの前で